

# ミシェル・アンリの「キリスト教の哲学」 から見た「技術資本主義」

古庄 匡義

## (和文要旨)

本稿の目的は、ミシェル・アンリの「キリスト教の哲学」の視点を通して、彼の「技術資本主義」を豊かに理解することである。『共産主義から資本主義へ』（1990）におけるアンリの現象学的な分析によれば、「技術資本主義」とは、資本主義経済のなかで近代科学によって飛躍的に発達した技術が人間の生を完全に排除することである。しかも、それは我々に自分自身の生を否定するよう強いるシステムなのである。しかし、彼はこの著作の中で疎外された生を回復するための方法を見出すことができていない。というのも、人間の生の本質を基盤に組み立てられている彼の説明は、まさに人間の生の本姓から帰結する自己否定の克服法を提示できないのである。そこで、本稿ではこの方法を、人間の生を存続させることのできる絶対的〈生〉を基盤にした、晩年の「キリスト教の哲学」のうちに見出す。『キリストのことば』（2002）にみられる「相互性／非相互性」という対概念によって、我々は、自己否定を引き起こす相互的な本姓を変化させ、人間の生の本質的な条件を、すなわち、非相互的に個々人に生を贈与する絶対的〈生〉を自覚することができる。「技術資本主義」に起因する問題を解決するのは、経済や科学技術における改良ではなく、人間の本性の根本的な変容なのである。

## (SUMMARY)

The purpose of this paper is to enrich our understanding of Michel Henry's "techno-capitalism" by way of looking at his "Philosophy of Christianity". In *From Communism to Capitalism* (1990) he analyzes "techno-capitalism" phenomenologically as the total elimination of human life by the techniques which modern science has developed so highly

in the capitalist economy, and moreover, as the system which forces us to negate our own life. However, he is not able to discover a way to recover the alienated life, for his explanation in this book based on the essence of human life does not suggest a method for overcoming the self-negation which results from the nature of our life itself. Therefore we must find this method in his later thought, in his “Philosophy of Christianity”, which is founded on the absolute Life that alone can maintain human lives. A pair of concepts in *Words of Christ* (2002), “reciprocity/non-reciprocity” enable us to change the reciprocal nature that causes our self-negation and to realize the essential condition of human life, the absolute Life, that gives life non-reciprocally to individuals. It is not an economic or technological improvement but a radical transformation of human nature that aims to solve the problems arising from “techno-capitalism”.

#### 1. 問題の所在<sup>(1)</sup>

フランスの現象学者、ミシェル・アンリ<sup>(2)</sup> (Michel Henry, 1922-2002) は、『共産主義から資本主義へ』(1990)において、近代科学によって肥大化した技術と緊密に結びついた資本主義を「技術資本主義 (techno-capitalisme)」と呼んで現象学的に分析し、現代の科学技術文明の中で自らを否定し毀損することを強いられている人間の生のあり方を明らかにした。

---

<sup>(1)</sup> 本稿は、2012年10月20日、宗教倫理学会第13回学術大会(於 龍谷大学アバンティ響都ホール)における口頭発表の原稿に、大幅に加筆修正を加えたものである。

<sup>(2)</sup> アンリの著作からの引用箇所は、引用の後に「(略号 原著の引用頁数)」を付加して明記した。『聖書』の章句はアンリの仏語引用を直訳し、訳語については新共同訳を参照した。訳文が新共同訳と大幅に異なる場合は、注にて新共同訳を示している。

EM *L'essence de la manifestation*, Paris, PUF, 1963, 2003 (3<sup>e</sup> éd.)

M2 *Marx ; tome II, Une philosophie de l'économie*, Paris, Gallimard, 1976 ; coll. Tel, 1991.

CC *Du communisme au capitalisme. Théorie d'une catastrophe*, Paris, Odile Jacob, 1990.

CMV *C'est moi la Vérité. Pour une philosophie du christianisme*, Paris, Seuil, 1996.

I *Incarnation. Une philosophie de la chair*, Paris, Seuil, 2000.

PC *Paroles du Christ*, Paris, Seuil, 2002.

しかし、これまでのアンリ研究において、「技術資本主義」の分析は十分に論じられていない<sup>(3)</sup>。私見では、その理由は二つあり、この二つに対して本稿は新たな読みを提示する。

第一に、技術資本主義の分析は、技術論として捉えると新奇性に欠ける。アンリの考える技術や近代科学の理解は、それぞれ単体として取り出すと、かなり単純であり、ハイデガーの技術論<sup>(4)</sup>のような精緻さを見出すことはできないように思われる。

しかし、アンリの技術や近代科学の分析は、彼の「生の現象学」をベースにした資本主義の理解の内部でこそ、本来の意味を顕にする。本稿では技術・近代科学・資本主義の三者の関係を明らかにするとともに、〈結局のところ、アンリにとって技術の問題は生の自己否定の問題に帰着する〉という読みを提示する。

『共産主義から資本主義へ』という著作は大きく2つに分けられる。前半（第4章、CC 109 まで）では、人間の生の固有の顕現について論じた上で、社会主義やマルクス主義、ファシズムなどが、人間を社会的・経済的な表象へと還元することによって人間の生を毀損することを批判する。ただ、ファシズムによる拷問の分析を通して、結局のところ生を毀損しうるのは非実在的な表象の総体ではなく、生自身の自己否定のみであることも示されている。

<sup>(3)</sup> 以下に示すように、「技術資本主義」の分析は「キリスト教の哲学」の枠内で再検討されるべき問題だと思われる。このようなスタイルの研究、つまり、「キリスト教の哲学」以前にアンリが取り上げていた問題を「キリスト教の哲学」以後の問題設定から再考する研究は、近年よくみられる。たとえば、Frédéric Seyler, « *BARBARIE OU CULTURE* » : *L'éthique de l'affectivité dans la phénoménologie de MICHEL HENRY*, Paris, Kimé, 2010 がある。ただ、このような研究の中で「技術資本主義」を主題としたものは、管見の限りみられない。セバーは「キリスト教の哲学」の視点に立って、『野蛮』（1987）にみられる「科学 - 技術 (technoscience)」を論じる (François-David Sebbah, « *Levinas, Henry, et la question de la technique* » in *Philosophie*, N° 114, été 2012, Paris, pp.74-91.). セバーは、「科学 - 技術」が「自らを転倒させ、〈世界〉のうちで自らを忘却し、そうして自ら自己否定する〈生〉の実践」であり、「『技術資本主義』として到来するものうちで最も根源的なもの」(op. cit., p.90) と論じているが、科学 - 技術と資本主義の関係についてはこれ以上言及せず、むしろ科学 - 技術そのものうちに生の自己否定を見出す。本稿では、科学 - 技術が生に自己否定を強いることを可能にするものとしての「資本主義」に焦点を当てるため、セバーが中心に取り扱う『野蛮』（1987）ではなく、『共産主義から資本主義へ』を扱う。

<sup>(4)</sup> アンリは以下の論考でハイデガーの技術論に言及している。端的に言えば、アンリはハイデガーが実践に固有の顕れ方(内在)を捉えていないと批判する。Cf. « *Le concept de l'être comme production* » (publié en 1975); in *De l'art et du politique (Phénoménologie de la vie, tome III)*, Paris, PUF, 2004, pp.11-40. この論考を以下の研究が論じている。参照：望月太郎『技術の知と哲学の知——哲学的科学技術批判の試み——』世界思想社、1996年、201～218頁。

それに対し、後半は、技術資本主義が生産や労働の過程から人間の生を完全に排除し、人間の生を毀損する、という議論にみえる。しかし、前半の分析を考え合わせると、技術資本主義は、生に完全なる自己否定を強要する壮大なシステムであり、しかも生の本性そのものが生み出したシステムだと解釈しうる。この理解が正しいならば、生に自己否定を強いる技術資本主義の分析と克服は、生の根源的な自己体験に基づいたアンリの「生の現象学」にとってきわめて重要な課題であり、十分に研究されるべきテーマだと思われる。

しかし、アンリの「技術資本主義」論は、問題の分析に終始し、問題の克服に至っていない。これが第二の理由である。もちろん、問題を問題として提示することはそれ自体重要であるが、やはり自己否定によって毀損した生を回復するための道筋を示してほしいところではある。

ただ、技術資本主義が生の本姓から生じてくる、という理解が正しいならば、人間の生の自己体験を起点に展開される『共産主義から資本主義へ』の議論ではこの道筋を示すことができないと思われる。人間の生の本姓に根ざす生の自己否定の問題を生の本姓である自己体験から解決しようとする循環的な議論では、解決策の提示は困難であろう。むしろ、人間の生の本姓を変容することができるもの、人間の生をそもそも可能にするものから思索を起す必要があるのではないだろうか。

そこで本稿では、人間の生を可能にする「絶対的〈生〉（Vie absolue）」を中心に議論を展開する晩年の「キリスト教の哲学」のうちに、技術資本主義のなかで損なわれた人間の生を回復する道筋を見出せるのではないかと、という仮説を立て、検証する。

以下の順序で議論を展開する。まず、アンリの基本的な発想と生ける労働（2）についての考察を概観した上で、『共産主義から資本主義へ』の「技術資本主義」分析の骨子と問題点を明らかにする（3）。そして、『キリストのことば』（2002）の中から相互性／非相互性という対概念を抽出し（4）、それらを用いて技術資本主義世界において自己否定を強いられた生を回復する道筋を探る（5）。

## 2. 生ける労働

アンリにとって現象学とは、現象の諸現出ではなく、現象の仕方や現象の本質を問う

営みであるが、彼はこの現象の本質さえもその顕現において問おうとする<sup>(5)</sup>。というのも、彼にとって、現象学の対象は何らかの仕方で現れていなければならないからである。そして、彼は現象の本質を超越と内在の二つと規定する。

アンリの考えでは、古代ギリシアからハイデガーに至るまでのほとんどの哲学が、現象の本質を「超越 (transcendance)」のみとする「存在論的一元論 (monisme ontologique)」(EM 59) に陥っている。超越とは、自らの外に - 立てることによって、自分自身から隔たったところに、「脱 - 立的な (ex-statique)」仕方で現象を顕にすることである。思惟や自己意識、そして後にみる近代科学や経済的価値も、超越という仕方で顕れる。

しかし、アンリはこの超越という顕現の本質それ自体の顕現を問う。現象の本質そのものの顕現の仕方は超越ではなく(もし現象の本質が自分自身から隔たったところに自らを〔超越的に〕顕にするとすれば、その顕になったものは現象の本質そのものではなく、本質の表象に過ぎない)、本質が自分自身から隔たりを置くことなく自らを顕にするような仕方でなければならない。アンリは、このような顕現を可能にしているものを情感性 (affectivité) と考える。それは、自分自身から逃れることも距離を取ることもできず、ただひたすら自らを被り、自ら自己自身を体験する (s'éprouver soi-même) という、根源的な受容性 (réceptivité) のことである。そして、この情感性に基づいて、本質が自分自身から隔たりを置かずに自らを顕にする仕方を「内在 (immanence)」と呼ぶ。このような内在的な顕現こそが真に実在的な自己顕現なのであり、「～として」表象された超越的な現れは非実在的で、内在的な顕現があってはじめて可能になる。

このようにして、アンリは「超越」と「内在」という二つの現れ方によって、人間の生の内在的・実在的な顕現を現象学的に分析する。そして彼は、『マルクス』(1976)以降、人間の行為や労働も主観的で情感的なものとして捉え、このような行為や労働の由来を「生の力」と「生の欲求」のうちに見出すようになる。

自己自身を根源的に被り、自己がまさに自己自身であることを可能にする情感性は、一つの主観的な力として、「生の力 (force)」として捉え直される。それは、自己自身のさまざまな力をまさに自己自身のもとにもたらし、自己自身の力にする根源的な受動

<sup>(5)</sup> アンリの「生の現象学」と、本稿第4節で紹介する「キリスト教の哲学」の基本的な枠組みについては、以下の拙稿などでも論じたが、本稿においても論述の都合上繰り返し紹介せざるを得ない。参照：『キリスト教の哲学』は可能か——ミシェル・アンリのことばの概念を手がかりに」、宗教哲学会編『宗教哲学研究』第28号、2011年3月、59～69頁。

性 (passivité) のことである。「自分自身に対する根源的な受動性こそが個人を生ける者にしている」 (CC 34)。そして、根源的に自己自身を被り、自己自身でしかありえないこと、自己自身から逃れられないことが「主観性」と名指される。

生の力が実現するのは、自己自身から逃れられないことの「堪え難さ (insupportable)」 (CC 48) であるのに対し、「生の欲求 (besoin)」とは、この堪え難さから逃れようとする欲求、生のうちに本質的に備わる生からの逃避のことである。自己自身から逃れられないことの堪え難さに苦しむ中で、人間の主観的な生のうちに、自己自身を消し去ろう、変えようと駆り立てる運動が生じる。アンリはこの情感的運動を「欲動 (pulsion)」と名付ける。この欲動に突き動かされて、行為が生じる。「情動 (affect) と行為との本源的結合のうちに、行為の原理、あくなき活動の原理が存している。このあくなき活動によって、生は、充足されない欲求の不快感を、充足による満足感へと転換させようとする」 (CC 49)。自己を自己自身に結びつける生の力と、自己から逃れようとする生の欲求、この2つの生の内在的作用が行為や労働、生産を可能にする。

これらのうち労働に関しては、アンリは主観的・情感的な「生ける労働 (travail vivant)」という概念で捉える。生ける労働とは、生産に必要な原材料や生産手段を、たんなる対象「として」表象し、有用なもの「として」認識することではなく、「有機的主体性の内的緊張において直面する生産物を変形する」 (M2 177) 実践である。すなわち、原材料や生産手段を内在的・情感的な要素として「掌握」したうえで、これらの要素に直面しながら生の欲求を満たすために行う主体的・内在的・情感的な実践である。「生は、自分を取り巻く自然を変える能力をもつ」 (CC 30) のである。

したがって、生ける労働によって生み出されるものは、生の欲求の帰結であり、生にとって価値のあるもの、要するに「使用価値」である。生によって掌握され、この掌握によって構造化されることで、物質的実体は生に適ったもの、生の「使用」に適したものとなる。このとき、その実体は「使用価値」をもつ (cf. CC 129)。生ける労働によって産み出された生産物の「使用価値」も、生ける労働それ自身も、内在的で情感的なものであり、表象・計量・交換不可能な実在性をもつものである。とはいえ、表象不可能なはずの生産物の使用価値は、交換価値として表象され、経済的過程のなかで他の商品と交換される。さらに、人間の生ける労働も労働時間として表象され、労働時間に見合った労賃などと交換される。なぜこのようなことが可能になるのか。

ここで重要なのは、生ける労働やその生産物の表象を生み出し、経済的過程を可能に

するのもまた、生の力と生の欲求だという点である。「経済の経済的ではない起源、それが生であり、生の力と生の欲求」(CC 164)なのである。生の欲求は、自らから逃れることができない苦しみから逃れ、満足に至ろうとするが、主観的な生ける労働そのものは表象不可能な実在性をもつ。だからこそ、苦しみに耐えかねた人間は、生の欲求に駆り立てられて、交換可能な自らの非実在的な表象を生み出し、諸表象の等価的な交換の場である経済的過程を考案して、価値の交換によって欲求を充足しようとしたのである。とはいえ、このような非実在的な自己表象は決して生ける労働の等価物ではないし、表象の「等価的な」交換によって必要な商品を手に入れても、「自己自身から逃れたい」という生の欲求は決して満たされないのであるが(cf. CC 113-114)。

ともかく、生ける労働が表象されると、人間の生は「等価的で非実在的で観念的な等価物の総体」(CC 114)である経済的過程のなかに組み込まれるが、この段階では経済的過程に生が従属するわけではない。非実在的な交換価値は、「恣意的で偶然的」(CC 140)な尺度に過ぎない。経済的過程は非実在的な表象の総体に過ぎず、実在的な生ける労働に裏打ちされてはじめて可能になる。生産物を生産しているのはあくまで生ける労働である。

### 3. 「技術資本主義」における生の自己否定

しかし、資本主義世界では、経済的な交換過程が自らの目的性にしがたって自律的に循環しているかのように振る舞い、個人の生ける労働を強く抑圧する。「商品経済から資本主義経済になるとき、経済の自律性が華々しく現れる。というのも、それまではたんなる手段であった交換価値こそが、新たな過程の目的性を定義するからである」(CC 167)。生ける労働は価値増殖のための一要素として抽象化される。そして、剰余価値の増殖という資本家の目的に従属させられ、資本の蓄積のための一手段として酷使される。生ける労働の生産過程こそが経済的過程を駆動していたのに、資本主義経済においては、「経済的過程の新しい目的性が、逆に生の過程に作用して、生の過程の内的構造をひっくり返してしまう」(CC 148)。

とはいえこの段階でも、生ける労働は、資本家に酷使され搾取されているとしても、生産過程から完全に排除されるわけではない。生ける労働こそが価値の増大を可能にする唯一のものであり、生ける労働なしに経済的な交換過程も成立しない。ただ、資本主

義が科学技術と結合して「技術資本主義」へと変貌するとき、生ける労働は価値生産の現場から完全に排除され、人間の生とは無関係に生産が行われるようになり、その結果、資本主義の経済的過程が、そして最終的には人間の生そのものが破綻する。

アンリは原初的な技術についてはきわめてシンプルに捉えている。それは、身体を使って生活必需品をうまく生産するための方法であり、生ける労働と本源的に結びついた実践知である。このような技術によって人間は、生にとって価値のある「使用価値」を効率よく産み出し、人間の生の力の効率を上げ、生の能力を増大させる。したがって、技術が近代科学を取り込む前の「生産性」は、「生産の効率、すなわち有益な——生にとって有益な——生産物を速やかに、うまく創造する適性」（CC 154）に過ぎない。

この技術は、近代以降の科学と結合したとき、人間の生とは無関係に発展し、生産性を著しく向上させてしまう。近代科学は、それ自体としては人間の生に対して中立的であり、生を毀損する意図をもたず、ただただ客観的・物質的な世界認識を際限なく拡張し、精緻にしていく。その結果、人間にとっての世界——身体を通して「主観的」に掌握された世界——から主観性を剥ぎ取り、この世界を物理的・数学的認識へと置き換える。このとき、人間の行為や生ける労働は、主観的で情感的なものではなく、「自然の過程と同様の客観的過程の総体という形態」（CC 159）で現れるものとみなされてしまう。このような近代科学を摂取した技術、「科学 - 技術 (techno-science)」は、人間の生と無関係に、科学が客観的世界認識を拡張していく独自のスピードに従って発展する。

この科学 - 技術を資本家に取り込んで生産性を上げようとしたとき、技術資本主義が形成される。資本家は自らの利益となる剰余価値を増やすために二つの手段をとる。一つは労働日の延長、つまり労働者をできるだけ長時間働かせて剰余価値を増やすことであるが、これには限界がある。一日は24時間しかなく、労働者に食事や睡眠の時間を与えなければならない。それに対し、もう一つの手段、生産性の向上は、生産手段を発達させることによって、際限なく可能である。そこで資本家は、科学 - 技術によって生産手段を進化させようとするが、科学 - 技術は、資本家の意図とは無関係に、意図をはるかに超えて生産手段を機械化し、肥大化させる。

その結果、機械生産の過剰発展によって、生産における人間の生ける労働の役割が失われていく。極端に言えば、人間のボタン一押しの操作によって、もはや人間が使用しきれず、交換もしきれない膨大な生産物を機械が供給してくれる。「近代的技術におい

て、ますます自動化されていく客観的な道具の配置 (disposition) に生産が委ねられるため、生産は人間の主観的活動を、すなわち人間の現実存在そのものを、だんだんと、しかし不可避免的に排除していく」(CC 161-162)。新たな価値の唯一の源泉であるはずの生ける労働は、「ボタン一押し」へと縮減され、生産過程から排除されていく。生ける労働は交換価値の源泉であるのに、微少な労働によって消費しきれない商品が供給されると、交換価値も経済的過程も根拠を失い、最終的に資本主義経済自体が成立しなくなる (cf. CC 171)。

もう一段深刻な事態をアンリは見通している。人間にとっての使用価値をもつ生産物が生産されなくなり、人間は生きる場を失うのである。生産過程において生産されるものは、技術革新のための技術、機械の生産性を上げるための機械——「超機械 (hypermachine)」——となり、人間にとって使用価値のあるものではなくなる。もはや機械は、機械生産の生産性をさらに向上させるための機械のみを生産し、機械自身の目的性に従って、自らを際限なく増殖させる。生産過程は「機械と超機械の客観的複合体」(CC 175) に占められる。このとき人間は、使用価値をもつ生産物を享受して生きることすらできなくなる。

確かにこれは極論である。どんなに技術が発展しても、人間が生きている限り、「ボタン一押し」の労働はなくなるまいし<sup>6)</sup>、最低限の生活必需品は生産されるだろう。ただ、このとき人間の生は、使用価値をもつものをほぼ完全に奪われた悲惨な生であり、「数世紀をかけて得たあらゆる財産を奪われ、……生きることの幸福を一層激しく体験するために構築した成果のすべてを奪われた生」(CC 221)、「文化も芸術も記憶も宗教もない生」(CC 222) となっている。豊かな文化や感情を育む欲望・想像力・愛が、物質的過程へと還元され、科学の客観的認識のもとで、計画的に組織される。人間の生は単なる「生理的諸欲求」へと追いやられ、ただただ生存している。

ところで、このように人間の生を毀損するのは、技術資本主義なのだろうか。『共産主義から資本主義へ』の前半部分の議論を踏まえるならば、生を毀損するのは実は生自身であり、技術資本主義は人間の生に自己否定を強いる壮大なシステムだと捉えられる。このことを示すべく、前半部分でアンリが「ファシズムが真の姿でわれわれに頭に

<sup>6)</sup> とはいえ、もし今人類が瞬時に消滅したとしても、世界に存在する様々な生産ラインは原材料の供給が続く限り生産物を生産し続けるだろう。それらの生産物は、人間がいなければ使用価値はもちろん、交換価値ももたない。それでも生産は自動的、自律的に行われる。このような「死の過程」(CC 176)こそが「技術資本主義」の究極的な形態である。

なる限界状況」(CC 94)だと述べる、「拷問」の場面を参照したい。

拷問は、極限的な苦痛を与えることによって、個人の核心である生の根源的な自己体験、自己の受苦そのものを支配する。しかしアンリは、この拷問による生の支配が生を毀損するとは考えない。むしろ、拷問の責め苦の中で、生の自己体験は「絶頂的な様相を帯び、実際耐えがたい強度をも」(CC 95)って、自らから逃れることができずにひたすら自らを受苦するという、自らの本質を究極的な形で実現してしまう(させられるのではなく)。

したがって、生を毀損するのは拷問ではなく、生自身である。拷問においては、生を生自身たらしめる「生の力」と、〈この苦しみから逃れたい、もはや自己自身でありたくない〉という「生の欲求」との対立が極限まで高まる結果、生は自らの本質を裏切って、自己自身から距離を置いてでっちあげられた自己の表象へと身を委ねる。たとえば、拷問に屈して密告者に成り下がるという行いは「まさしく生が完全に生であるとき」に生じるからこそ、「生をまるごと毀損する」生の自己否定なのである(CC 96-97)。密告者は、何の価値もない密告者としての表象を自ら引き受けて生き続けなければならない。密告者の生は、自分自身ではないものとして生き続ける生であり、自己自身であろうとする生の本質を否定し、ひいては自らの生そのものを否定し続ける生である。

この議論を踏まえるならば、『共産主義から資本主義へ』後半の「技術資本主義」も人間の生の自己否定について語られていると考えることができる。ただし、技術資本主義は、拷問のように生の自己受苦を直接的に支配するものではなく、生が自己否定せざるを得ない状況に追い込む壮大なシステムであり、しかもこのシステムを作ったのは生ける者たち自身なのである。

技術資本主義においては、一見、機械生産の過程が人間の生きる場を奪い、生を毀損しているようにみえるが、実はこの過程を産み出し駆動しているのは、欲求の充足を目指して行為する者たちの生の力と生の欲求である。技術資本主義のなかで、価値を蓄積しようとする資本家の欲望は、肥大化した機械生産の過程によって資本家の意図をはるかに超えて増幅され、資本家自身も含む全ての人間の生の労働や消費の場を奪う。このとき生はたんなる「生理的諸欲求」として表象しうるものにまで縮減され、ただただ生存することを強いられる。われわれは、自らの生を毀損する意図をもたないのに、資本主義世界のなかで科学・技術を用いて自らの生の本性を極限まで拡張した結果、生の自己否定を強いるシステムを無自覚に構築してしまった。もはや生の否定の原因が自分た

ち自身にあることにさえ気づけない。

では、「技術資本主義」世界に生きるわれわれに、豊かな生を回復する方法はあるのだろうか。この方法を『共産主義から資本主義へ』のアンリは提示できず、著作の結論部分で悲痛な叫びをあげる。「それでも生は存続しており、自己自身に踏み留まって、自己を放棄しなかった」（CC 221）。すべてを奪い去られても、剥き出しの生は自己を根源的に体験し、決して無にされない。抑圧された諸個人のまなざしに輝く真理、これこそが「生の叫びである。それは、真理とは生であり、真理は生きることを欲するのだと叫んでいる」（CC 224）。このような嘆きで著作が結ばれている。

では、なぜアンリは豊かな生を回復するための方法を提示できないのだろうか。私見では、その理由はこの著作の枠組みのうちに存する。この著作の議論の出発点は、超越的な経済的過程の非実在性に対し、人間の内在的な生ける労働の実在性を対置することだった。つまり、この著作は、生の実在的な顕れ方（内在）の固有性にもとづいて組み立てられている。したがって、人間の生に固有の実在性を根拠にした議論では、同じく人間の生の固有の本性に起因する生の自己否定を克服する道筋を示せないのである。

すると、この道筋を示すには、人間の生の顕れ方を超える観点に立って、人間の生の本質そのものを転換する必要がある。そこで、人間の生を可能にする「絶対的〈生〉」の概念をもつ、アンリ晩年の「キリスト教の哲学」のうちに回復の道筋を探る。次節では、人間の行動の基本原則である「相互性（*réciprocité*）」と、それを転換する原理、「非相互性（*nonréciprocité*）」とを提示する『キリストのことば』の議論を検討する。

#### 4. 相互性と非相互性——「キリスト教の哲学」

技術資本主義を批判するアンリは、人間の生の現れ方に真の実在性の源泉を見出していたが、「キリスト教の哲学」のアンリは、人間の生それ自身がいかんにして生まれ維持されるのかと反省する。そして、自分で自分の「生（*vie*）」を生み出すことができず、「絶対的〈生〉（*Vie absolue*）」に生を与えられるものとして人間の生を捉え、絶対的〈生〉との関係において人間の生の根本的なあり方を現象学的に分析しようと試みる。

聖書の章句を織り交ぜながら思索を展開する、アンリ晩年の「キリスト教の哲学」に至って、生を分析するための枠組みも大きく変化する。まず、内在的な現れ方が、人間の生の自己体験と、絶対的〈生〉の自己産出（*auto-engendrement*）の二つに区別される。

人間の生は確かに自己自身を根源的な受容性において体験し、情感的に自らを頭にするが、この体験を引き起こしたのは人間自身の力能や意志ではない。人間は自分の生を自分で開始できない。それに対し、絶対的〈生〉は自らの自己体験を自分自身で開始し産み出すことができるという。人間は、この絶対的〈生〉の自己産出のうちで、生を与えられ、自己を根源的に体験することが可能となる (cf. CMV 135-136)。

ただ、人間には、自らの生を可能にする絶対的〈生〉を認識することが出来ない。人間が根源的な自己体験において実在的に体験しうるのは、自分自身だけである。よって人間は、自らの力能によって自分自身を根源的に体験することができ、自らの生を自ら開始できると考えてしまう「超越論的エゴイズム」に原理的に不可避免的に陥っている。

しかし、克服不可能なはずの原理的なエゴイズムからの「救済」の道筋があるという。それは、生ける者の生が絶対的〈生〉に一致することである。この一致は、認識のレベルではなく、生ける者の行為や実践において可能になるという。しかもその行為は、「天におられる私の〈父〉の意志を行う (faire la volonté)」<sup>(7)</sup> こと、すなわち、生ける者自身の我意に発する行為ではなく、「〈父〉の意志、すなわち絶対的〈生〉の自己産出の過程」(CMV 209)において引き起こされる行為である。自己の力能や意志によらずに行為してしまっていることが、生ける者の生の「パトス的な内的自己変容」(CMV 218)を引き起こし、自分を越えたもののうちで生かされていることを自覚させる。このときまさに「私が生きるのではなく、キリストが私のうちに生きておられる」(『ガラテヤの信徒への手紙』2章20節、CMV 213)。このような行為において人間の生が絶対的〈生〉に一致する。

さて、前節で、技術資本主義における生の自己否定の原因は、人間の生の本性、生の力と生の欲求に起因すると論じたが、この生の本性はまさに自己自身の力能や意志によって自らを体験し、行為を開始できると勘違いする「超越論的エゴイズム」に陥っている。したがって、エゴイズムからの「救済」は技術資本主義からの「救済」に直結する。

では、「キリスト教の哲学」のテキストから、技術資本主義からの克服の道筋を具体的に描き出すことができるのだろうか。残念ながら、晩年のアンリは技術資本主義について直接言及することはないが、私見では、アンリが『キリストのことば』で導入する

<sup>(7)</sup> 『マタイによる福音書』7章21節からの仏語引用 (CMV 209) を直訳した。新共同訳では、「[わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。] 私の天の父の御心を行う [者だけが入るのである]」。

「相互性／非相互性」に関する議論によって、技術資本主義からの「救済」を考察できる。というのも、この議論によれば、「キリストのことば」は、資本主義的な価値交換を含む、エゴイスティックな人間のあらゆる行為の基盤となる人間の本性、すなわち「相互性」を転覆し、絶対的〈生〉の「非相互性」に眼を向けさせるからである。

たとえばイエスは、「しかし、あなたがたは敵を愛しなさい、お返しに (*en retour*) 何も期待しないで善いことをし、貸しなさい。そうすれば、あなたがたの報いは大きく、あなたがたはいと高き方の子となる。いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも情け深いからである」<sup>(8)</sup>と述べる。この「お返しに」が「相互性」である。つまり、何かをしてもらった「お返しに」何かをするという人間の本性である。資本主義経済における交換では、自分が与えるものの等価物を相手から受け取することを期待する(返済を期待して貸す)。また、この相互性は、非実在的な表象の等価交換の関係だけでなく、何ら表象が介在しない関係、たとえば情感的な愛の関係にもみられる。敵を愛するのではなく、愛してくれる人を愛することは人間の相互的な本性に根ざした自然なことであり、この相互的なやり取りが、お互いの関係を自然に拡張・強化し、個人間の関係であれ社会的な関係であれ、あらゆる人間関係の基盤を構築する (cf. PC 36-38)。

それに対し、アンリは「非相互性」を「神の無限なる生のうちで我々の有限なる生が内在的に生成されること」(PC 46)と表現している。絶対的〈生〉が自己産出の過程のうちで人間に「絶えず生きることを贈与する」(PC 54)。相互的な「お返しに」を期待しない、絶対的〈生〉の永遠で無償の生の贈与こそが「非相互性」なのである。

キリストのことばは、血縁関係や社会・経済的関係にみられる相互性の原理とは全く別の原理を示唆し、相互性から非相互性への「人間の条件の転覆」(PC 41)を目指している。「神の意志を行う人は誰でもわたしの兄弟、姉妹、また母である」(『マルコによる福音書』3章35節、PC 47)ということばは、アンリによれば、相互性に根ざした血縁関係から信仰共同体への転換を指し示すだけでなく、人間の本性そのものを相互性から非相互性へと変容することを、すなわち、絶対的〈生〉との内的関係のうちで生きることを、神の〈子〉となることを命じている。こうして「人間の条件は、人間同士相互関係の体系によって、人間の観点から規定されるのではなく、各々の人間の神と

<sup>(8)</sup> 『ルカによる福音書』6章35節の仏語引用(PC 44)を直訳した。新共同訳では「しかし、あなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうすれば、たくさんの報いがあり、いと高き方の子となる。いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深いからである。」

の内的関係によって規定される」(PC 45)。「しかし、あなたがたは敵を愛しなさい……」ということばも、人間の相互性の原理を打ち砕く。「お返しに」を期待せず、悪人にも情け深い神のように行為する人は、絶対的〈生〉の自己産出の過程のうちで生きており、エゴイズムから脱却している。

ただ、このことばは具体的になすべき行動の内容を規定していないことに注意すべきである。イエスにならって、返済を期待せずに金を貸したり、愛したい人を無理に憎んだりしても、これらの行為は、「いと高き方の子」にふさわしいものとなるための対価として行われる限りで、相互性の原理に根ざしている(cf. PC 46)。キリストのことばは、人間の次元で理解されて文字通り実行されると、相互性の次元に引き下ろされてしまう。逆に言えば、人間が理解しうる言葉では、相互性を超えるための行為の具体的な内容を指示することはできないのである。それでは、われわれは何をすればエゴイズムを超えたことになるのか。

しかし、この問いそのもののうちに、「救われるための対価は何か」という相互性に根ざした発想を見出せる。この問いを発すること自体がエゴイズムに囚われている自分自身を露呈する。かといって、「何をすれば」と問わずに、絶対的〈生〉のうちで生きていれば(神を信じていれば)何をやってもいいのだと開き直ることも許されない。いったい、われわれはキリストのことばにどう向き合えばエゴイズムを克服できるのか。

エゴイズムの克服は相互性の原理の否定と生の本性の根本的変容によって生じるが、それは、「私が生きるのではなく、キリストが私のうちに生きておられる」かのような、我意によらない純粋に内在的・情感的な行為によって可能になる。この行為は、「何をすればいいか」とか「何をやってもいい」とか、われわれの判断によって実行できる行為ではなく、キリストのことばに突き動かされて生じる行為である。このような行為の実現それ自体が、キリストのことばを聴き取ることであり、人間の根本的な条件である絶対的〈生〉の非相互性の自覚、相互性から非相互性への生の本性の転換なのである。

## 5. 結びにかえて

「キリスト教の哲学」の立場から省みるならば、「技術資本主義」論の意義は、技術資本主義は結局人間の生の相互的な本性に起因するので、生の本性そのものを変容させなければ技術資本主義のシステムが引き起こす生の自己否定も止められないことを示

した点に存する。技術資本主義における生の自己否定を克服する「端緒」は、人間の生の根本条件である絶対的〈生〉の非相互性の自覚に存する。

この結論は、技術資本主義の克服の道筋を、行為の内容ではなく、絶対的〈生〉という行為の源泉に求めている。「キリスト教の哲学」では、生の純然たる自己体験と情感的な顕現そのものが「よい」と考えるため<sup>9)</sup>、生の根本条件の自覚それ自体がよい行為の原則となってしまう。つまり、技術資本主義の問題の解決策の「内容」を問うことが許されない。技術資本主義も、技術資本主義の解決のために何をなすべきかという問いも、等しく相互性に根ざしており、まさにこの相互性を克服しなければならないからである。しかし、解決策の「内容」を問わずして、自己否定を強いられた生を回復する道筋を見出せるのだろうか。少なくとも言えることは、生の根源的な善性という前提を受け容れるならば、アンリの批判は、技術資本主義の問題の困難さ——人間の意志や力能で相互性の拒否や克服を求めること自体も相互性に根ざしている——を示すとともに、この問題を適切に問う「端緒」——我意によらない、絶対的〈生〉に促された行為——も示している、ということである。

#### キーワード

ミシェル・アンリ、キリスト教の哲学、技術資本主義、絶対的〈生〉、  
相互性／非相互性

#### (Keywords)

Michel Henry, Philosophy of Christianity, Techno-capitalism, Absolute Life,  
Reciprocity / Non-reciprocity

---

<sup>9)</sup> 「……生が自ら自己自身を体験するときに体験するものではなく、自ら自己自身を体験するという業 (fait) や、生の自己享受であるようなこの体験の幸福こそが、生がよい (bon) ものだ」と生に言う……」 (I 320)